

琉球絣

Ryukyu Kasuri

1611年薩摩より木綿の種子と織技術の導入により始まりました。

600種に及ぶ幾何学文様は生活や自然を図案化したものが多く、絹糸、綿糸、麻糸を使用して、素朴な味わいと端正な風格を有しています。

原材料／絹糸、綿糸、麻糸

主な製造地／那覇市、南風原町、八重瀬町

主な製品／着尺、帯地

生産者組合／琉球絣事業協同組合



南風原花織

Haebaru Hanaori

南風原花織には四種類の花織が含まれています。

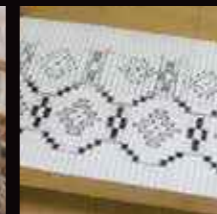
喜屋武八枚やタチリーなどの両面浮花織、緯浮のクワンクワン花織、縫取織のチップガサー、綾織の南風原斜文織の四種類です。

原材料／絹糸、綿糸、麻糸又は毛糸

主な製造地／南風原町

主な製品／着尺、帯地

生産者組合／琉球絣事業協同組合



久米島紬

Kumejima Tsumugi

500年前に中国より養蚕の技術を導入し、
織られた沖縄最古の紬織物です。

地域特性を活かして、草木染め、泥染、
きぬた打ち等の古来からの技術を守って生産され、
丈夫さ、着心地の良さで高く評価されています。

原材料／生糸、真綿の手つむぎ糸
主な製造地／久米島町
主な製品／着尺、帯地
生産者組合／久米島紬事業協同組合



宮古上布

Miyako Jofu

起源は16世紀後半に自生の苧麻を用いて
織ったのが始まりです。

糸は細かく、緋模様は精微で、藍染め、手績み糸、
手織り等、昔ながらの手法で作られ、
夏物着尺を代表する高級紺上布として
珍重されています。

原材料／手績みの苧麻糸
主な製造地／宮古島市、多良間村
主な製品／着尺
生産者組合／宮古織物事業協同組合



八重山ミンサー

Yaeyama Minsa

起源は未詳です。綿糸をインド藍、琉球藍、フクギ、紅露等の植物染料で染めた緋織物です。たてうね織の一種で、主に南国的な明るさを持つ帯、ネクタイや袋物を生産しています。五つの緋と四つの緋が交互に配され、「いつの世までも末永く」という意です。

原材料／綿糸
主な製造地／竹富町、石垣市
主な製品／帯、ネクタイ、他
生産者組合／竹富町織物事業協同組合
石垣市織物事業協同組合



八重山上布

Yaeyama Jofu

起源は未詳ですが、記録の上では17世紀初めの薩摩への貢納布として知られています。苧麻を原料として、緋は手づくり又はすり込み捺染で、染料は琉球藍、紅露などの植物染料を用いています。白地に緋が浮かぶ夏物の白上布です。

原材料／苧麻糸、手績みの苧麻糸
主な製造地／石垣市、竹富町
主な製品／着尺
生産者組合／石垣市織物事業協同組合
竹富町織物事業協同組合



与那国織

Yonaguni Ori

起源は定かではありませんが、15世紀末の記録が残されています。与那国花織、与那国ドクタティ(縞織物)、与那国カガヌブー(ミンサー)、与那国シタディ(手巾)の4種の織物があります。原料は絹糸、綿糸、麻糸などで、染料は地元の植物染料を用いています。

原材料／絹糸、綿糸、芭蕉糸、麻糸
主な製造地／与那国町
主な製品／着尺、帯、手巾、テーブルセンター等
生産者組合／与那国町伝統織物協同組合



工芸の島 沖縄
Interview
婦人画報&美しいキモノ
編集部編集長
富川 匡子

深い歴史と幅広い技法 世界に誇る 沖縄の染織品

『美しいキモノ』は1953年に創刊し、今年で66年を迎えます。沖縄が本土復帰した直後に紅型特集をするなど、沖縄とは切っても切れない関係です。また、「着物」という日本文化においても沖縄の染織品は欠かせないものだと思います。

技法的にもバリエーションが非常に豊富で、長い歴史を持ち、それがいまだに伝わっている…。一つの地域にこれだけ様々な技法が残っているのは日本だけでなく世界中でも例がないですし、素晴らしいと感じています。



『美しいキモノ』に掲載された沖縄の染織特集

作りの丁寧さ・ぬくもりを感じる

優しさとおおらかさが表れている紅型がある一方、非常に精緻な織り組織を追求した首里織などがあり、そうした振幅が沖縄の染織においてバリエーションを生んでいると思います。

着る側としては作りがとても丁寧で、職人さんのぬくもりが感じられるのが魅力です。まさに「手仕事の国」で作られた着物や帯は信頼して着ることができます。

着物好きの間では近年沖縄のブームが続いています。色も綺麗で華やかですし、今の人たちの



感性にぴったりと合うのかもしれませんが。消費者を意識して新たなものを作るなど、さらに高みを目指していらっしゃり、工夫や研究を重ねる熱心な姿勢も素晴らしいと思います。

Profile
1995年ハースト婦人画報社に入社し「モダンリビング」「婦人画報」の編集を経て、2002年から「美しいキモノ」編集部で活躍。2013年に「美しいキモノ編集長」に就任し、66年の歴史あるきもの誌で現代の生活に開いたファッションの一部としてのきものコーディネート提案。2017年6月に「婦人画報」編集長に就任し、両誌の編集長を兼務。

三線 Sanshin

三線は、14世紀にルーツとされる三弦が中国より伝えられたと考えられています。貝摺奉行所の名工により琉球独自の発展を遂げ、現在では沖縄の文化芸能に不可欠な楽器となっています。棹には黒檀等の堅い木材を使用し、胴にはニシキヘビの皮等を張っています。シンプルな形状ゆえに、高度な製作技術が求められます。

原材料／黒檀、紫檀、ユシ木、イヌマキ、ニシキヘビの皮 等
主な製造地／沖縄県全域
主な製品／主要な型として、南風原型・知念大工型・久場春殿型・久葉の骨型・平仲知念型・真壁型・与那城型
生産者組合／沖縄県三線製作事業協同組合



ていわぎ
と
ぬくもり

工芸の島 沖縄
Interview

国指定重要無形文化財
琉球古典音楽保持者(人間国宝)

照喜名 朝一

戦後まもなく買った 愛着ある三線

いま持っているこの三線は、戦後質屋にあって「買わないか?」と言われて買ったものです。当時は給料が手取りで10ドルぐらいでしたが、これは50ドルぐらいで買いました。ちょうど指のポジション、押さえるツボがピタッと合って弾きやすいので、もう当時からずっと弾いています。本当は黒漆だから色は黒だったのですが、ずっと使っているので変色して茶色になってしまっています。



三線は癒しの元、そして家族

僕は戦後、航空会社に務めて飛行機の整備をしていましたが、これは人命に関わる仕事で大変なことです。ピス一本でも緩みがあったら見逃してはいけません。そういう仕事を戦後ずっとやっていた、仕事を終えた後で弾く三線が一つの癒しになっていました。あと当時は今みたいに飛行機が頻繁にある訳じゃないから、飛行機を待ってる間に工場で三線を弾いたりもしていました。

三線はいくつもありますが、中でもこの三線は戦後間もない時に買ったものだから愛情を持ってずっと弾いています。もう家族です。今でも三線を

弾いて唄を歌うと、気分がスーッと楽しい。弾かなかっただら寂しいです。まだまだ三線を持つ力がある内は弾いていたいし、生きてる間は弾こうと思っています。



Profile

1932年沖縄県南城市知念出身。幼少から三線に親しみ、25歳から本格的に古典音楽を安富祖流師範・宮里春行に師事。多くの入賞・受賞を経て、2000年に沖縄の芸能部門で初めて重要無形文化財「琉球古典音楽」の保持者(人間国宝)に認定される。国内外で指導・演奏を行い、世界に琉球芸能を紹介。後継者育成・創作活動にも意欲的に取り組んでいる。